H.O.T.D.二次小説

キョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｈ．Ｏ．Ｔ．Ｄ．二次小説

【Ｎコード】
Ｎ８０８７Ｔ

【作者名】
キョウ

【あらすじ】
交通事故で死んだはずの俺が神の気まぐれで新しい人生を貰うことに。その世界はなんと・・・Ｈ．Ｏ．Ｔ．Ｄの世界！？（主人公はＨ．Ｏ．Ｔ．Ｄを知りません）
処女作品です。期待しないで見て下さい。とりあえず原作のストーリーと大体同じ感じで進んで行きます。
Ｒ１５と残酷描写ありは一応つけました。

第一話＋二話（前書き）

処女作です。
期待しないで見て下さい。
一話と二話が一緒になってます。（すいません、二話が短くなってしまい申し訳ありませんが一話と一緒に見て下さい。）
まだ原作には入っていません。

第一話十二話

第０１話

「何処だ、ここ？」

目が覚めたら真っ白い空間にいた。上を見ても下を見ても左右を見ても全てが白かった。

「えっと、俺、さっき・・・車にはねられて？」

（そうだ、小さい子が風船追いかけ車道に出て助ける為に行ったのは覚えてるけど。）

「！そうだ、あの子は！？」

「大丈夫。生きてるよ」

なにもないところからいきなり声がする。

「！誰だ！！」

格闘技などをかじっていたのですぐ応戦体制に移る。

「大丈夫だよ。って言っても姿が見えないから信じられないか。ちょっと待ってね。」

声がそう言うといきなり何もないところから光が出てその光は少年のような形になった。

「何で俺がいる？」

驚くのも当然。その光は小さい時の俺だったからだ。

「ごめんね。悪いけど君の姿を借りたよ。」

驚いたがすぐ応戦態勢をとる。

「お前誰だ！？ここは何だ？俺は死んだんじゃないのか？」

俺の形をした奴はやれやれと言ってゆっくりと話し出す。

「そんなに一度に言わないでよ。凶神　刃君。一つづつ答えよう。先ず一つ目君は死んだ。小さい子を助けようとして車にはねられて死んだ。即死だよ。」

刃の応戦体制はゆっくりと解けていく。

「・・・。」

少し止まり、また話し出す。
「二つ目。ここは何処だ、と言われても名称はないよ。強いて言うなら死後の世界かな。」
「死んだら天国か地獄に行くもんだと思ってた。まさかこんなとこだと思ってなかったがな」
クスクスと笑いながら刃の形をした奴は話す
「それは人間が勝手に創造したことだよ。どんなに善行をしてもどんなに悪行に手を染めても人生はリセットされる。君の言ってる天国も地獄も無い。」
「んじゃ、なんで俺はリセットされないんだ？それともみんな死んだらここに来るのか？」
刃の形をした奴は首を横に振る。
「普通は自動的に死んだらリセットするようになってる。」
刃は不思議そうな顔をする。
「？じゃあ、何故俺が？」
一呼吸置いて言う。
「気まぐれかな。」
刃はその問いに少し止まる。
「・・・・・・。は？」
刃の形をした奴はニコニコしながら言う。
「んっとね。結構暇だからさ、数百年に1回新しい人生をプレゼントすることにしてるんだ。と、いう事で新しい人生頑張ってね。」
そう言うと刃の足元が消え真っ逆さまに落ちていく。
「あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
その穴に向かって刃の形をした奴は言う。
「ああ、それと僕はね。君たちの言うところの神だよ」
第1話終了

第2話

刃side

気が付くと俺は溶液の入ったカプセルの中にいた。
（身体に力がはいらない。クソ！何だここ？それに俺の身体小さいぞ、新しい人生最初からこれかよ）
そう思っているとカプセルが斜めになり溶液ごと俺は出された。
そして白衣を着た二人組みが俺にタオルを掛け一人が俺の身体を持ちもう片方が話しかけてきた。
「・・ん・。・・・・・・・・・も・・・・・・・・・わ。・・た・・・自由・・・・・・い。」
（なにいってやがるんだ？耳が殆ど聞こえない）
口を開けて喋ろうとしても声が出ない。
（くそ、目の前が暗く・・、なって・・・き・・・・た・・・・。）
そこで俺の意識は途絶える。

刃side out

???side

二人の白衣を着た男女が刃の入ったカプセルを見つめる。
「良いんだね？多分こんなことをすれば僕たちは殺される。それでもやるかい？」
男がそういった後すかさず女が言う。
「何言ってるの？あの子はどんなになっても私たちの子よ。この研究の残りの実験体はもうあの子しかいない。あの子は絶対に守らないと。」
「そうだね。こんな悪夢のような実験を僕たちの子に受け継がすべきじゃない。さぁ、やろう。」

二人は向き合う。
「「愛してる」」
二人はキスを交わし刃のカプセルの近くの操作盤をコントロールし零を出す。
そして男が出てきた刃にタオルを掛け、持つ。女は刃に話しかける。
「ごめんね、親らしいことは何も出来なかったけど愛してるわ。あなたは自由に生きなさい。」
「さぁ、行こう。時間が無い。」

???side out

～8年後

刃side

気が付くと俺は孤児院にいた。あの白衣を着た二人に孤児院の前に置いていかれたようだ。ただその孤児院は金持ちからの支援で成り立っていて俺や他の奴も学校に行かせられるだけのお金があり俺は高校に行った。とりあえず二年になり適当に過ごしていた。次の日にすべてが終わってしまうと知らずに。

第2話終了

第一話十二話（後書き）

誤字脱字があったら連絡して下さい。
とりあえず一週間内にまたＵＰします。
読んでいただき有難うございます。
駄作ですいません。

第三話（前書き）

ま、まさかユニーク１１８人も・・・。こんな駄文を読んで頂き本当に有難うございます！！
では今回から原作に入っていきます。月曜が休みなんてラッキーでした。

第三話

第３話

刃ｓｉｄｅ

「暇だな」

俺は校内をぶらついていた。最初の人生で死ぬ前は高三で高校の大体の勉強は分かっているのでテストはそこそこ取れるのであまり授業には出ていなかった。別に単位が取れなくなる程サボっているわけでもないのであまり教師達にはあまり言われない。

適当に行くと屋上に行く階段で小室　孝と会った。

「よお、お前もサボりか？」

「あぁ、刃か。お前も？昨日あんまり寝てなくて屋上で寝ようと思って。」

「そうか、俺は昨日ぐっすり寝たから校内ぶらぶらして暇つぶしてるよ。授業タルイしな。俺は食堂に行ってジュースでも買って飲んでるかな。じゃな、お休み～。」

そういって俺は食堂に向かって歩く。あいつとは結構仲が良い。一年のとき授業サボってたらあいつと会って話が合い友達になった。

（しかし、あいつ振られたオーラ出しすぎだろ。分かりやすいな。）

「さて、ジュース買いに行くか。」

刃ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

孝ｓｉｄｅ

僕は授業をサボり屋上に向かっていた。麗に振られて一緒にいずらくて逃げていた。向かっていた途中刃と会った。

「よお、お前もサボりか？」

「あぁ、刃か。お前も？昨日あんまり寝てなくて屋上で寝ようと思

って。」
「そうか、俺は昨日ぐっすり寝たから校内ぶらぶらして暇つぶしてるよ。授業タルイしな。俺は食堂に行ってジュースでも買って飲んでるかな。じゃな、お休み～。」
そう言って食堂に向かっていった。僕が麗に振られたのに気が付いてそっとしてくれたんだろうか、いつもだと一緒に屋上に行くのに。
（ありがとな、刃）
屋上に着き手すりに寄りかかる。
「うお、すげー桜・・・。こんな所まで・・・。」
回想
「あたし孝ちゃんのお嫁さんになったげる。」
「ほんと？ほんとにほんと？」
「うん！」
「ゆびきりげんまん！」

「どうして留年なんかしたんだよ？優等生なのに・・・。」
麗は泣きながら
「孝には・・・。分からないわ！！」
「わから・・・ないわ」

井豪　永とは高一から同じクラスだった。（今年も一緒か）
「また同じクラスだな。よろしく」
「ああ」

永と麗は手を繋ぎながら楽しそうに歩いている。
「それでね・・・」
回想終了
「ゆびきりげんまん　ウソついたら　針千本・・・」
「？」
ガシャッ　ガシャッ　ガシャッ　ガシャンッ

校門の方で不審者っぽいのがいるようだ。林先生達がその不審者に警告に行く。
「なんですか　あなたは？」
ガシャッ　ガシャンッ　ガシャッ　ガシャッ
「なんだ　あれ？不審者か」
「止めなさい！さもないと警察を「まぁまぁ、林先生。呼ぶまでもありませんよ。とっ捕まえちまいましょう」

「こらあっ」
手島先生が不審者の胸元を掴む。
グイッ　ガシャンッ
「！？」
「ちょっ・・・手島先生暴力は」
「いや、こいつ力が－－－－」
ボロボロ
不審者の口から何かが落ちる。
ドサッ
「ひっ！指・・・け、けいさつっ」
ガ　ツッ
（不審者が手島先生の腕に食いついた！？）
「ギャッ　あああああああああぁぁぁぁ」
「てっ、手島先生！」
「やめっだめだっ喰われて。噛まれ、いや止血！止血だ！校医の鞠川先生を・・・」
「ぎっ　がっああ　あっ」ガシャッ
「け、警察！救急車も！」
「な！」
「がっ」
「手島先生！気をしっかり持って！！」
ビクッ　ビグンッ

「がっ」
「だ、駄目！。血が止まらん！」
ゴトンッ
「し・・・死んだ・・・。」
「そ　そんな・・・。」
ピクッ
死んだと思った手島先生が目を開ける。
パチッ
「手島先生！大丈夫ですか　手島先生」
「よか・・・」
グイッ　ガツッ！！
手島先生は起き上がり林先生の首に噛みつく
「ーーーーーーーーー！！！」
「ーーーーーーーーーーーーー！！！！」
「ぎゃっ」
「ぎゃああっ」
「な、なんだってんだよこれ」
そして僕は何故か身体が動き麗の元へと走った。
第3話終了

第三話（後書き）

どうだったでしょうか？楽しんでいただけたら嬉しいです。
誤字脱字があったらご連絡下さい。ご意見、ご感想は頂けたら嬉しいです。
学校脱出まではまだ少しかかります。更新速度は亀みたいに遅くなるかも知れませんが頑張っていこうと思います。
長々と申し訳ありません。このような駄文を読んでいただき有難うございます。

第四話（前書き）

どうもゆっくり過ぎる更新のキョウです。
最近いきなり暑くなったり大雨降ったり大変ですね。被災者の方も
まだ大変でしょうが頑張って下さい。
では、四話どうぞ

第四話

第４話
刃ｓｉｄｅ
「なんだこいつ等？」
「アアアアアアアアアアア」
身体が血だらけで内臓や眼球が出た男がこっちに向かってくる。
（まるで、ゾンビ映画だな。噛まれたらやばそうだな。ん？噛み傷が多い、噛まれたらああなるってわけか。）
ゴキッ　バキッ
とりあえず膝に蹴りを入れ足を折り、すぐ距離を取る。
「さぁ、どうだ？」
男は倒れるが這いずってこちらに来る。
（痛覚はないのか？構造が元は人間だから骨をやったらさすがに立てなくなるか。んじゃ頭はどうだ？頭潰しても動いたら手が出ないぞ）
「せい！」
グシャッ
踵落しをくらわせ、またすぐ距離を取る。
男は頭部を潰され動かなくなった。
「頭が弱点かな。とりあえず頭潰せば大丈夫か。しかし、数が多いとキツイな」
ガッ
『全校生徒・職員に連絡します！全校生徒・職員に連絡します！
　現在　校内で暴力事件が発生中です！
生徒は職員の誘導に従って直ちに避難してください！！
繰り返します　現在校内で暴力行為がは　ブッ！』
『キィーーーーーーーーン』
「・・・喰われたか」

『ガキンッ――――ン
ギャアアアアアァァァァァッ
あっ　助けてくれ　止めてくれ　たすけっ　ひっ
痛い痛い痛い痛い！！　助けてっ死ぬっ
ぐわあああああぁぁぁぁぁあああああ！！！！』
し・・・・・・・・・・・ん
「「きゃあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！うわあああああああぁぁぁぁぁぁ！！」」
「ちっ！！まずいな。」
（校外には一人だとキツイな、武器もない。とりあえず武器だな、剣道場に木刀あるはず）
「探すか、」
とりあえず剣道場に向かう。
「邪魔だ！」
ガッ　ゴキッ　バキッ
蹴りで対応しながら剣道場に向かう。
「よし、あった」
木刀を一本取り少し素振りする。
ブンっ　ブンッ
（よしっ腕はあんまり鈍ってないな。さて、どうするか。とりあえず職員室行って車の鍵パクるか）
＜奴ら＞をいなしながら進んでいく。
刃ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

孝ｓｉｄｅ
麗と永を強引に廊下に連れ出し廊下を走る。
永がそういうことなら武器が要ると言って僕にはバット、麗にはモップの柄を渡した。永は空手の有段者だから大丈夫らしい。そこで少し話しをしてたら放送が入った。
『全校生徒・職員に連絡します！全校生徒・職員に連絡します！

現在　校内で暴力事件が発生中です！
「ようやく気づいたな。」
生徒は職員の誘導に従って直ちに避難してください！！
繰り返します　現在校内で暴力行為がは　ブッ！『
「まさか」
『キィーーーーーーーン』
『ガキンッーーーーーン
ギャアアアアアァァァァァッ
あっ　助けてくれ　止めてくれ　たすけっ　ひっ
痛い痛い痛い痛い！！　助けてっ死ぬっ
ぐわあああぁぁぁぁぁあああ！！！』
し・・・・・・・・・ん
「「きゃあああああぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！うわあああああああぁぁぁぁぁぁ！！」」
ほとんどの校生徒がパニックになり我先にと走り出す。
永と向き合いお互い頷く。
方向を転換して管理棟に向かう。
「えッ外に向かうんじゃなかったの！？」
教室棟は人で溢れ返ってる！！　管理棟から逃げる！！」
たたたたたたたたた
「あれって現国の脇坂？」
（ッ！！あれはもう＜奴ら＞になってる）
うううううぅぁ
「逃げろ！！」
ガッ
「え？」
「なっやだっ」
ブン　ブン　麗はモップの柄を振る。
「近寄らないで！！」
「おらっ何やってんだよ脇坂ァ！！こっちだこっち！！」

キッ
「槍術部を・・・なめるなぁ！！」
ドスッ
ズプッ
「ヴッ」
ブンッ
「え！？」
「し、心臓を刺したのに　な、なんで動けるの！！」
ガッ
「麗！！」
永が脇坂を掴み麗から引き離す。
「麗！今のうちに引き抜けっ！」
ズボッ
「永っ」
「永　直ぐに離れろ！　！脇坂は・・・普通じゃない！！」
「心配するな　こんな奴　俺が投げ飛ばして・・・・」
ググッ・・・・
「！？」
「なっ　こ　こいつなんでこんなに力が！？」
ガ　ッ！！
「ぐっ・・・・」
永の腕に脇坂が噛みついた。
「永ッ！！」
「てめぇっ」
ゴキンッ
「永から離れろっ！」
バキ　ボキ　パキッ
「永ッ！！」
ドスッ
「くっ」

ググググッ　ググッ・・・・
何度叩いても脇坂は気にもしていなかった
「～～～～～～ッ」
「なんで　どうして　どうして離れないのよっ！！」
「やはりそうだ・・・」
「なに言って・・・」
ブチッ　ぐりんっ　ミチッ
「死んでるんだこいつは・・・死んでるのに動いてるんだ！！
でなければ心臓刺されて動ける訳がないし・・・傷から血が噴出してるはず・・・」
「ぐあああああっ」
ブシュッ
「永っ！！」
「男でしょっ　じゃあどうしたらいいのよ！！　なんとか・・・・。」
「・・・。」
「なんとかしなさいよ！！」
ぐしゃあっ！！
ガクンッ
「永ッ！！大丈夫！？」
「ちょっと肉を裂かれただけだ大した事ないそれよりも・・・」
「こんなのがうろついてるとなると逃げるのを急がないと」
「！」
お　お　お　　お　お　お　う
「こっちだ！こっちなら楽に一階に逃げられる！」
「！！」
「ねぇっ下の階・・・・」
「いやあああああああっ　止めて　痛い　噛まないでぇ・・・・あっ　食べないでぇぇぇぇぇっ！」
ああああああああああああああああああああ

下の階では何人も＜奴ら＞に喰われていた。
「あんなの何人も相手にしてられないぜ」
「・・・・・屋上に出よう。救助が来るまで立てこもるんだ」
「屋上に立てこもるったって一体どこに・・・・」
「天文台がある！」
今にして思えば　この時無理にでも外へ逃げ出しているべきだったかもしれない
「ハッ　ハッ」
でも　あの時は一番それがいいように思えたんだ
バ　ン
屋上に出ると町から黒い煙が出ていた
第４話終了

第四話（後書き）

どうだったでしょうか？あと、三話ぐらいで学園脱出です。
誤字脱字ありましたら連絡下さい。
こんな駄文読んでいただき有難うございます。

第五話（前書き）

ゆっくり更新ですいません。キョウです。
今回は主人公出ません。
では、五話ですどうぞ。

第五話

第５話

孝ｓｉｄｅ

屋上に出ると町から黒い煙が出ていた

「一体何が起こってるんだ・・・」

「・・・警察が電話に出ないはずだ」

バラバラバラ

「なんなの　これ　一体何が起こってるのよ！！」

「ねぇ　永　孝！教えてよ！朝までは・・・・」

バラバラバラ

「ううううん　遂さっきまではいつも通りだったのにバババババ・・・・

ヘリ？」

ゴォ！

「きゃあっ」

バラバラバラバラバラ

ヘリが屋上を通り過ぎる

「ブラックホークだ」

「アメリカ軍・・・あっ・・・違う自衛隊だ！」

「どこから来たんだ？近くに駐屯地なんてないのに！！」

「助けてーっ！！」

バラバラバラ

「無駄だ」

「なんでよっ！」

「孝の言う通りだからさ。どこから来たんだ？っていっただろう？

確かにその通りなんだきっと特別な任務を与えられてる。　俺達を

助けている余裕なんてない」

「それに　見ろよ・・・」

ああああ　ああ　あ　　ああ
「あれを見ても放っているんだ」
そっちを向くとグラウンドにいる生徒が何人も喰われていた。
「走り回って逃げられる外ですらああなんだ。きっと校舎の中は今頃・・・」
ぎゃああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁ
病気のようなもんなんだ、＜奴ら＞にーーーー」
「＜奴ら＞？」
「ああ、映画やゲームじゃあるまいしゾンビと呼ぶわけにもいかないだろ」
「ともかく　＜奴ら＞さ。＜奴ら＞は人を喰う。そして喰われた奴が死ぬと＜奴ら＞になって蘇る。理由は分からないが頭を潰す以外に倒す方法はない。・・・」
ギャアアアアアアアアアアア
ビクッ
ガチャン　ガチャ　ガチャ
「クソッ壊れて・・・これじゃあ＜奴ら＞が入ってくる！」
「永ッ！どうするんだよ！！」
「・・・・。天文台の上に上がって・・・・階段を塞ぐんだ。」

そしていつものように永は正しかった
少なくとも今はまだ安全だ
「・・・天文台にマッチかライターを探すんだ。そうすれば夜＜奴ら＞のうごきが・・・ガフッ」
パタタタ
永が血を吐く
「永！！どうしたの！！」
「ゲホッ　ガホッ　ガフッ」
「孝！！孝！！永が！！」
「なんでだよ！ちょっと噛まれただけだろ！　どうしてこんなに酷

く・・・・」
「・・・映画通りだって事さ。噛まれるだけでもう駄目なんだ」
「そんなのウソ！映画みたいな事なんて絶対　ガシャンッ！」
「ゴホッ周りは映画通りだ。・・・ゴホッ」
（あぁ、もう永は・・・。そういえば刃はどうなったんだ？）
「ゴホッ・・・孝、手伝ってくれないか。ゴホッ」
もう、答えは分かってる。けど・・・
「・・・・何をだよ。」
「ゴホッゴホッあそこからなら地面まで真っ直ぐに・・・」
永は手すりを指差す。
「多分ぶつかった衝撃で頭も潰れる筈だ。」
「なに言って！！」
「ゲホッ俺は＜奴ら＞になりたくない！！な、孝頼む・・・俺は最後まで俺でいたい・・・」
ビクンッ
「うげぇぇっ」
バシャァァァ
「永！永！！いやぁっ死んしゃだめぇっ」
ゴトッ
「だめぇっ　だめよぉぉっ！！あああああああああああ」
「・・・・・・」
『俺は＜奴ら＞になりたくない――――――』
「離れるんだ　麗」
「はっ　だめぇっ　そんな事しちゃだめぇっ！！」
「ならないわっ！永は＜奴ら＞になんてならない！！永は特別なのよ！！」
「・・・・離れろ」
ピクッ
「永！ほら！孝！永が死ぬはずなんてない――――」
ググググッ

ボトッ
「永？」
ボトッ　ボトボト
「うう・・う」
グイッ
「ひさっ――――そんな・・・こんなのウソ　ウソよ・・・」
ズルッ　ズルッ
「確かにバカバカしいよ　でも　本当なんだ！！」
ゴツッ！
「いやあああああっ！！なんでなんで！！」
「やらなければ麗が喰われてた」
「私が・・・私は！私は助けて欲しくなんかなかった！！永のこんな姿見たくなかった！！こんな風にして生き残るくらいなら永に噛まれて　私も＜奴ら＞になりたかったのに！！」
ぐっ
「奴がそれを喜んだとは思えない」
「孝に何が分かるっていうの？」
「そうだわ　そうだったのね！孝は　本当は永を嫌ってたのね！！私と　付き合っていたから！！」
本当に――――――――――――
「――――――！」
「――――――！！」
そうだったかもしれない
「ちょっと　どこにいこうってのよ！！」
「僕が一緒にいたら邪魔だろ、下に降りて＜奴＞らを叩いて来る」
「なっ何言ってんのよ！一人でどうにかなる訳ないじゃない！！」
ガシャッ
「ねえ？」
ガシャッ
「孝？」

ガシャッ　ダッ　ガシッ
「やめてぇっ　だめっだめえっ　ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！」
本気じゃないの！！　本気で言ったんじゃないのっ！！お願い　一緒にいて！！」
ガシャン
「は」
僕は戻って麗を抱きしめた。もちろんそう言って貰えて嬉しかっただけど・・・・　同時に僕は弱りきっていた
一体どうすればいいんだ・・・・。
第５話終了

第五話（後書き）

誤字脱字ありましたら連絡お願いします。
すいません、次で主人公出ます。

第六話（前書き）

どうもキョウです。
来週はテストで更新できないかもです、すいません。

第六話

第６話
刃ｓｉｄｅ
俺は木刀を使いながら職員室に向かっていた。
「うう　あああ　ぁぁ」
「邪魔！」
バキッ　ドシャッ
「ふぅ、キリがないな。しかし、後少しで『パシッ　パシッ』？銃声にしては軽いな。だがとりあえず生きてるのはいる。人数は今は少しでも多いほうがいい。助けるか」
銃声？の音がする所に行ったら職員室前でガス式釘打機（改造）で＜奴ら＞を撃っている奴がいた。
「これじゃ特性なんて調べようがないじゃない！！」
パンッ　パンッ
「高城さんも戦って下さい！」
「なんでアタシがそんな事しなきゃならないのよ！」
「もうすぐマガジンが空になるんです！」
「だからなんなのよ！！すぐ詰め替えればいいでしょ！」
「でも、いますよ・・・後ろに」
ゴボ　ゴボ　ゴポッ
「きゃあああ」
「！」
「ああああああ」
「ちっ伏せろ！」
そう言って俺は持っている木刀を投げ＜奴ら＞の頭に当てる。その返り血が高城の身体にベッショリと付く。
走って近づこうとすると別方向から黒髪の女が木刀を持ちながら走ってくる。

「私が右の二匹をやる！」
その反対方向に小室達が来る。
「んじゃ、俺は真ん中一人！小室！左宜しく！！」
「分かった！麗！」
「左を抑えるわ！やあ！」
ズドッ
「ほう・・」
ドドッ
バキャキャッ
「らあああああっ」
グシャッ
みんなが一人ずつやり締めに俺が蹴りで最後の一匹を潰す。
「しっ！」
ゴシャッ
宮本と鞠川校医が高城の方に向かう。
「高城さん！大丈夫？」
「みやもとぉ」
黒髪が喋り出す。
「鞠川校医は知っているな。私は毒島　冴子3年A組だ」
「小室　孝2年B組」
「去年全国大会で優勝された毒島先輩ですよね！わたし　槍術部の宮本　麗です」
「あ　えと　びB組の平野こ　コータです」
「凶神　刃だ」
「よろしく」
ニコッ
毒島が柔らかい笑みを向ける。平野は顔が真っ赤だ。
「なにさ　みんなデレデレして・・・」
「何言ってんだよ　高城」
「バカにしないでよ！あたしがその気になれば誰にも負けないのよ

！！」
「もういい。充分だ」
高城は返り血で染まった自分の体を見る。
「あ　ああ・・・ああこんなに汚しちゃった。ママに言ってクリーニングに出さないと」
高城は泣き出し毒島先輩に抱きつく。
「う　ううああ　ああああ　うわぁぁぁーん」
ガシャッ　ガシャン
高城が泣きやみ職員室に入るとみんながくつろいだ。
「皆　息が上がっている。少し休んでいこう」
俺は木刀がもうぼろぼろだったので変わりになりそうなのを探す。
話し合いには混ざらない面倒だしな。
「鞠川先生　車のキィは？」
「あ　バックの中に・・・。」
「全員を乗せれる車なのか？」
「うっ　コパンです。」
「部活遠征用のマイクロバスはどうだ？壁のかぎ掛けにキィはあるが」
平野が窓からバスを確認する。
「まだあります」
「バスはいいけど　どこへ？」
「家族の無事を確かめます　近い順に回るとかして必要なら家族も助けてそのあとは安全な場所を探して」
（甘いな。それに・・・恐らくもう安全な場所なんてない）
「見つかるはずよ　警察や自衛隊だって動いているはずだから地震の時みたいに避難だって・・・。どうしたの？」
麗はテレビを見て止まっていた
「なんなのよ　これっ・・・」
「麗　どうした・・・　！」
毒島先輩はテレビの消音をオフにする

『・・・・です。各地で頻発するこの暴動に対し政府は緊急対策の検討に入りました。しかし自衛隊の治安出動については与野党問わず慎重論が強く・・・』
「暴動って何だよ！」
ピッ
『・・・ません。すでに地域住民の被害は一〇〇〇名を超えたとの見方もあります。
知事により非常事態宣言と災害要請は・・・パンッ発砲です！ついに警察が発砲しました！バンッ状況は分かりませんが・・・パンッ
キャアアアアアアア！！いや　なにっうそった　助けっ　うあっあああああああっ』
ザッ　一度しばらくお待ち下さいの画面になりすぐスタジオに変わる
『・・・何か問題が起きたようです。こっ　ここからはスタジオでお送りします』
「それだけかよ・・・どうしてそれだけなんだよ！」
（パニックを恐れて、か。しかし、もう遅いだろうな）
「パニックを恐れてるのよ」
「いまさら？」
「いまだからこそ　よ！恐怖は混乱をうみだし混乱は秩序の崩壊を招くわ。そして秩序が崩壊したら・・・どうやって動く死体と立ち向かうの？」
（へぇ、あんなに取り乱してたのにもうあんなに冷静でいられるのか）
『・・・・・屋外は大変危険な状況になっている為可能な限り自宅からでないで下さい。また自宅の窓・入口はしっかりと施錠し窓などは可能な限り補強してください。何らかの理由により自宅にいられなくなった場合は各自治体の指定した避難場所へ・・・・』
パッ
『全米に広がったこの異常事態は収拾する見込みがたっておらず合衆国首脳部はホワイトハウスを放棄　洋上の空母へと政府機能を

移転させるとの発表がありました。なお　これは戦術的核兵器に備えた措置であるとの目測が流れております。なお　現在の時点でモスクワとは通信途絶　北京は全市が炎上　ロンドンは比較的治安は保たれていますが　パリ　ローマでは略奪が横行・・・・・・』
「朝ネットをのぞいた時はいつもどうりだったのに・・・」
「信じない　信じられない・・・たった数時間で世界がこんなになるなんて　ね　そうでしょ？絶対に大丈夫な場所あるわよね！？きっとすぐいつもうどうりに・・・」
「なるわけないし」
（ぎゃあぎゃあうるせーな。ん？お、いいもん見っけ。鉄パイプだ。でもなんでこんなとこに？ま、いいか）
「そんな言い方することないだろ」
「パンデミックなのよ？仕方ないじゃない！！」
「パンデミック・・・」
「？」
「感染爆発の事よ！世界中で同じ病気が大流行してるってこと！」
「インフルエンザみたいなものか？」
「１９１８年のスペイン風邪はまさしくそう！最近だと鳥インフルエンザにその可能性があると言われてたわ　インフルエンザをなめちゃいけないのは分かってるわよね？スペイン風邪なんて感染者が６億以上死者は５０００万人になったんだから・・・」
「それより　１４世紀の黒死病に近いかも・・・」
「その時はヨーロッパの３分の１が死んだわ」
「どうやって病気の流行は終わったんだ？」
「色々考えられるけど・・・人間が死にすぎると大抵は終わりよ感染すべき人がいなくなるから」
「でも　死んだ奴はみんな・・・動いて襲ってくるよ」
「・・・拡大は止まることは無いということか」
「これから暑くなるし肉が腐って骨だけになれば動かなくなるかも」
「どれ位でそうなるのだ？」

「夏なら２０日程度で一部は白骨化するわ、冬だと何ヶ月もかかる
でもそう遠くないうちには・・・」
「腐るかどうかなんて分かったもんじゃないわよ」
「どういう意味だよ」
「動き回って人を襲う死体なんて医学の対象じゃないわ。ヘタする
といつまでも・・・」
「家族の無事を確認した後何処に逃げ込むかが重要だな。ともかく
好き勝手動いていては生き残れまい。チームだ　チームを組むのだ。
生き残りも拾って行こう」
「チームね、まとりあえずここから出るには人数が必要なのは確か
だな」
「どこから外へ？」
パンッ
「駐車場は正面玄関からが一番近い」
パンッ
「行くぞ！！」
第６話終了

第六話（後書き）

次回で学園脱出です。
誤字脱字あったら連絡お願いします。
読んでいただき有難うございます。

第七話（前書き）

やっとテスト終わりました。長かった・・・。
最近は３０度越えが多くて大変ですね。みなさん熱中症に気をつけて下さい。水分の補給はこまめに。
では、七話どうぞ。

第七話

第7話
刃side
「行くぞ！！」
孝の一声で俺を含めた7人が今から即席のチームとなった。
「最後に確認しておくぞ　無理に戦う必要は無い避けられるときは避けろ！転がすだけでもいい！！」
「連中　音にだけは敏感よ！それから普通のドアなら破るぐらいの腕力があるから掴まれたら喰われるわ！気をつけて！」
「キャアアア！」
「！」
ううううう　うううううう
階段には三人の男女が＜奴ら＞に襲われていた
「卓造・・・」
「くそっ・・・下がってろ！」
パスッ
「！？」
ガシャッ
グシャッ
ゴッ
「あ　ありが・・・」
「大きな声は出すな。噛まれた者はいるか？」
「え、いませんいません！」
「本当に大丈夫みたい」
「僕らは学校から逃げ出す。一緒に来るか？」
「え　ええ！」
「・・・・」
玄関に着いたがかなりの数の＜奴ら＞がいた

「やたらといやがる」
「見えてないから隠れる事ないのに」
「じゃ　高城が証明してくれよ」
「！」
「たとえ高城君の説が正しいにしても・・・襲われたときに身動きが取れない。」
「玄関を突き通るしかないのね」
「だれかが、確かめるしかあるまい」
「「・・・・・・。」」
「じゃ、僕が「待てって」！？」
「こういうときの俺だろ？」
「私が先に行くほうが」
「毒島先輩はいざという時とサブリーダーとしてもあるから控えてないと」
「じゃ、やっぱり僕が」
「お前は一応リーダーだろ？こういうのは危険大好きな俺に任せろって」
そう言って俺は＜奴ら＞の群れ？に向かって行った。
（おお、マジで見えてねぇ。どうよ、孝こいつら見えてねーぜ）
＜奴ら＞のど真ん中でみんなに手を振る。
（あれ？なんでみんな苦笑いしてんだ？ま、いいや。そこのシューズを遠くに投げてっと）
ガシャンッ
シューズはロッカーに当たり＜奴ら＞は音のした方向に向かう。行ったのを確認しドアを開けると孝たちに向かってＯＫサインを出す。
一人ずつ外に出て最後の一人になった時
「あ、やべ」
さっき助けた奴の刺又持っているやつが刺又を壁にぶつけた。
ガキィィィィン
すぐ孝と俺が叫ぶ

「「走れ！！」
その一言で全員が走り出す。
「なんで声出したのよ！黙っていれば手近な奴だけ倒してやり過ごせたかも知れないのに！！」
ヒュッ　ゴキッ
バキッ
「あんなに音が響いたんだもん、無理よ！」
「話すより走れ！！」

「もうすぐだ！」
「やあっ　」
卓造はバットで＜奴ら＞と戦っていたが首に掛けていたタオルを引っ張られ
ぐいっ
「うわっ　ぎゃあああああ」
「卓造！！」
「諦めて！！噛まれたら逃げても無駄・・・・」
女は首を振り喰われている卓造の元に走る
「なんで！なんでよ！！ちゃんと教えて上げたのに！どうして戻るのよ！信じられない！」
「・・・・・・・・・・・」
「私、わかるわ。もし世界中がこんなになってしまったら・・・死んでしまったほうが楽だもの」
「あんたそれでも医者なの！・・・「あぶないっ」　パァンッ
「落ち着いてください高城さん」
「この腐れヲタ！なんの権利が有って私の話の邪魔をするのよっ！」
「～～～～～っつ　お話なら俺が後でいくらでも付き合いますから」
「仲良しで羨ましいことだ」
「先生！キィを！」

鞠川がバスにのり運転席に行く
ガチャッ
コータは窓から身体を半身出す
「窓から撃つよ！」
「俺が援護する！全員乗れ！」
ガキッ　バキッ　グシャッ
「さっさとしろ！俺でもずっとは無理だ！」
「全員乗った！！」
「孝っ先輩っ先に乗れ！！」
ルルルル　ブルンッ
「・・・・・ってくれぇっ！！」
「！」
「誰だ？」
「３年Ａ組の担任紫藤だな」
「っち」
「・・・・・・紫藤」
「もう出せるわよ！」
「もう少し待って下さい！」
「前にも来てるっ！！集まり過ぎると動かせなくなる！！」
「そんなの踏み潰せばいいじゃないですかっ」
「この車じゃ何人も踏んだら横転するわ！」
バキッ
「俺の方もそろそろ限界だぞ！！」
「くっ」
ガッ
前に行こうとした孝を麗が止める
「あんな奴助ける事ないわ！」
「麗！！なんだってんだよいったい！！」
「助けなくていいあんな奴！死んじゃえばいいのよ！！」
「あーっくそ！！乗るならさっさと来い！！俺は無敵のヒーローじ

ゃないんだぞ！！」
「じゃあ私も援護を・・「ストップ！俺だけでいい！もうほとんど乗ってる！！　あ？邪魔だボケッ！！」
グシャッ
「鞠川さん！！全員乗った！！出せッ！！！！」
「行きます！！」
「・・・・助かりました。リーダーは毒島さんですか？」
「そんな者はいない　逃げる為に協力しあっただけだ」
ドロロロロッ
「もう人間じゃないっ！　人間じゃない！！」
ドガァァァァッ
ゴシャアアアアアッ
バスは＜奴ら＞を轢きながら進む
「それはいけませんね　生き残る為にはリーダーが絶対必要です。目的をはっきりさせ秩序を守らせるリーダーが・・・」
「後悔するわよっ絶対に助けたこと後悔するわよ」
「校門をぬけますっ」
第７話終了

第七話（後書き）

どうでしたか？やっと学園脱出です。
誤字脱字あったら連絡お願いします。
読んでいただき有難うございます。

第八話（前書き）

八話です。暑くて気力が・・・。そういえばそろそろ夏休みですね。

第八話

第８話
刃ｓｉｄｅ
外に出た途端バカが騒ぎ出した。
「だからよぉっ！このまま進んだって危険なだけだってば！だいたいよぉっ！」
ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
鞠川校医が五月蠅いのにいらいらしてそうにバスを運転している。
「なんで俺らまで小室達と付き合わなけりゃいけないんだ？お前ら勝手に街へ戻るって決めただけじゃんか！寮とか学校で安全なとこ探せばよかったんじゃないのか？」
気の弱そうな奴まで言う
「そうだよ・・・このまますすんでも危険なだけだよ・・・立て篭もったほうが　さっきのコンビニとか」
外を見るとヘリから人が叩き落とされていた
「今からだって遅くない！だいたい俺は・・・」
鞠川校医がバスを止める
「もういい加減にしてよ！こんなんじゃ運転できない！」
「～～～～～～～ッ」
「んだよぉっ　何見てんだやろうってのか」
孝に言った言葉だが俺も混ざる
「へ～。なに？殺っていいんだったら俺が殺ってやろうか？」
バカはビビる
「い、いやお前に・・・あんたに言ったんじゃなくて・・・」
「ほ～～？孝にはケンカ売れて俺には売れないのか？雑魚？」
ちょっとだけガンをとばす
「ひっ　す　スイマセ・・」
ドガッ

「ごえっ　が　あ　ごほっ」
言葉の途中で腹に蹴りを入れる
「助けてもらった分際で何いきがってんだ？あ？キーキーキーキー喚きやがって、次喚いたら殺すぞ？」
パチ　パチパチ
「素晴らしいチームワークです。孝君刃君」
「しかしこうして争いが起こるのは私の意見の現われでもあります　だからリーダーが必要なんですよ　我々には！！」
（何言ってんだこいつは？）
「で？候補者は一人っきりってワケ？」
「私は教師ですよ高城さん　私は教師　皆さんは学生　これだけでも資格の有無ははっきりしてます」
紫藤は後ろの席に座っている生徒に向き合う
「どうですかみなさん？・・・私なら問題が起きないように手を打てますよ？」
パチパチパチパチパチ
「・・・と　言う訳で多数決で私がリーダーという事になりました・・・今後は・・・」
麗はバスの入口に走る
「先生開けて！・・・開けてください　私降りる！」
「え？ででもあの・・・」
麗は逆の席の扉を開け、出る
「麗！！」
「イヤよ！そんな奴と一緒にいたくなんてない！！」
「行動を共に出来ないならば仕方ないですね」
「何言ってんだあんた・・！」
そして孝も外に出る
「街までだ！街まで我慢するだけじゃないか！それに歩きじゃ危険・・・」
「だから後悔するって言ったのよ！！」

「ともかく今は!!　プワァーーン　!?」
バスが猛スピードで孝たちのところに突っ込んでくる
「なにやってんだ　あれじゃ・・・」
バスを見るとバスのなかは<奴ら>だらけだった」
ドガァァァァァァンンン
「・・・・・・!!」
「孝!!無事か!!」
燃えながら<奴ら>は歩いてくる
「警察で　東署で落ち合おう!!」
「時間はっ!!」
「午後5時!!できなかったら明日!!」
そう言うと孝は走って行く
「鞠川さん!ここはもう駄目だ　バスを出してくれ」
「分かったわ!別の道を!」
刃side out
孝side
「警察で　東署で落ち合おう!!」
「時間はっ!!」
「午後5時!!できなかったら明日!!」
そう刃に言って麗の手を掴む
「急ごう　麗!」
「うん!」
とりあえず<奴ら>から僕たちは少し離れる
「街まで歩き?」
「他に方法が無ければ・・・いや待てよ・・・」
「!」
目の前に壊れてなさそうなバイクがあった
「・・・免許持ってたっけ?」
「無免許運転は・・・高校生の特権!!」
つまり　僕はまだ分かっちゃいなかったんだ

この世はもう終わってるって事が――――――

第８話終了

第八話（後書き）

誤字脱字あったら連絡お願いします

第九話（前書き）

すみません少し遅れてしまいました。
えーと今回は孝だけです。
やっと夏休みです。今年もかなり暑くなりそうなので水分補給などして脱水症状や日射病に気をつけて下さい。

第九話

第９話
孝ｓｉｄｅ
そして僕らは終わりの意味を知ることになった
キィィィィーーーーーーン
戦闘機が僕らの近くを飛ぶ。麗は手を振って飛行機の後部座席の隊員が手を振る。しかし戦闘機は止まるはずも無く僕らを通り過ぎて行った。
「助けが来たのかも」
「そんなことは絶対無いよ。」
キイイイイイイイッ
一旦バイクを止める
「どうして盛り下がる事ばかり言うのよ！」
「学校の屋上で見たヘリと同じさ！たとえ自衛隊が動いていても僕らを助ける余裕はまだない。もしかしたら・・・この先もずっと」
「じゃあどうしたらいいっていうの？」
「出来ることを可能な限りやる　それだけさ！！」
「孝っていつもそうよね。大事な時に盛り下がる事を口にして・・・幼稚園の時からずっと」
「それとなんの関係があるってんだよ！！」
「ないけど・・・あるのよ！」
「！」
ふとメーターを見るともう少ししかガソリンが無くなっていた
「もういくらも走れないな　スタンドを捜さないと」
「信号二つ先にあったと思うけど・・・」
とりあえず少しずつ移動していく。みると人影が全く無かった
「誰も・・・いない　死んだか逃げたか・・・」
「死んだら＜奴ら＞になるじゃない！！」

「追いかけていったのさ・・・生きてる連中を」
「孝　右！交差点の右側！」
「まさか！！」
そこには一台のパトカーの先が見えていた
「無免許　ノーヘル　盗んだバイク！！補導されんの確実だな！！」
「さんざん＜奴ら＞と戦ってきていまさらパトカーが怖いの？」
後から思うとそれが終わりの意味を知る第一歩だった
パトカーの前に行くとパトカーの後ろがトラックにぶつけられてグシャグシャだった席にいる警官は死んでいた
「マジかよ・・・」
麗がパトカーに近づいていく
「麗！！何するつもりだ　パトからガソリン漏れてるから危ない！」
「役に立つものが手に入るかも！・・・なにボケてんのよ！孝もやりなさいよ！」
麗は正しかった　パトカーを探って僕らは初めて本物の“武器”を手に入れる事ができたのだ
麗が拳銃を僕に渡す
「使い方分かる？」
「テレビで見た通りなら・・・確か撃つ時以外引き金に指掛けなきゃいけないんだよな・・・」
「どうしたの？」
「なんかずっしりくる」
「当たり前でしょ本物だもん」
クッ　カシャッ
シリンダーラッチを押しシリンダーの中の残弾を確認する
「五発しか撃てないのか・・・」
「手、出して　これ」
ジャラ
弾を五発麗が渡してくる　血で汚れた手を拭きながら喋る
「もう一人の巡査の　銃は握るところが折れてたけど弾は大丈夫み

たいだから・・・」
「凄いな・・・お前」
「お父さんが持ってるの見せてもらったこと有るし　それに今さら血がついたぐらいで驚くとおもう？」
拳銃をポケットに差込みまたバイクに乗る
「これ捨てる？」
バットとモップの柄を持ち麗が喋る
「予備はあったほうがいいし銃は練習しないと当たらないよ」
「でも　銃があるからちょっと安心してるでしょ？」
「・・・・・・・」
そしてガソリンスタンドに着く
「ガソリン残ってるかしら」
「どんなスタンドでも乗用車千台分ぐらい入るタンクを備えてるっていうから　大丈夫だろ　チッ」
「どうしたのよ？」
「このスタンドセルフ式だ　そこにカードかお金をいれないと」
「入れたらいいじゃない！！」
「ジュース買ったから三十円しかないんだよ！」
「最低」
「悪かったな！俺は永じゃないんだよ！」
「なによいきなり！私がいつ永と比べたのよ！」
「最低って言ったろ！てことは最高が有るって事じゃないか！　永の事に決まってる！」
「本当に・・・最低ね！」
ブンッ
「！！」
僕は金貸して貰おうとして手を出すがそれが麗は殴られると思ったのか目を閉じた
「・・・なによ」
「金・・・貸してくれ」

「・・・財布鞄の中に入れっぱなしだもん」
「なんだよ！自分の事は棚に上げてたのかよ　ここで待ってろよ何かあったら叫べ」
そう言って僕はレジのあるほうに行く

第9話終了

第九話（後書き）

誤字脱字あったら連絡お願いします

第十話（前書き）

えーとすいません今回も主人公出ません。
今回は少しだけ性的な表現が含まれるためそういう表現が苦手な方はご遠慮ください。
なお、この話を無視しても多分大丈夫なので御安心下さい。

第十話

第１０話
孝ｓｉｄｅ
「誰かいませんか？・・・・」
レジのボタンを押しても何も反応がなかった
「ダメか・・・ま、いいか一度やってみたかったし」
そういって僕は台に乗りバットを振りかざす
そうさ　わかっていた　楽しくなりだしていた　ぼくはこの世界が好きになり始めていた
ガシャァン
孝ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
麗ｓｉｄｅ
ガシャッ　ガシャンッ
レジのあるほうから何かを壊してる音が聞こえた
「・・・やりたい放題ね　あたしも孝の事は言ってられないか」
　この時まで気がゆるんでたのかもしれない
麗ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
孝ｓｉｄｅ
「これだけ有れば他で必要な時でも・・・」
「キャアアアアアア」
突然麗の悲鳴が聞こえる
「麗！！」
麗の元に行くと男がナイフを麗に突きつけていた
「ひゃーーーっはっっはっは！！」
「兄ちゃん可愛い彼女連れてるじゃねーか」
「麗を放せ！！」
「ばーか　放すかよ！化け物だらけになっちまったこの世界で生き残るには女がいねーとなぁ　ひゃわはははははは！！」

「・・・壊れてるのか　お前」
「壊れてるのかだって？当たり前だ！！俺の家族は目の前であいつらと同じになったんだよ！俺は・・・俺は・・・家族の頭ブチわってきたんだ！！親父もオフクロもバァちゃんも・・・弟も妹もなぁ！！まともでいられるわけねーだろぉ！！」
「孝っ！・・・」
いきなり麗の胸を男が揉む
「ひぐぅっ！」
「あー声も胸も最高だぁぁぁぁそれになかなかの巨乳ちゃんだぜぇっおまえこの子とヤリまくってんだろ？」
「たかっ孝っ」
「ヤってねーのかよ？バカじゃねーの？ひゃはははは！！」
こいつ殺してやろうかと思い近づこうとする
「おーっとバットを捨てなでなけりゃこの娘を殺す！！それから・・・バイクも頂くぜ！！」
「ガソリンがない」
「レジをぶち壊したんだ金はいくらでもあるだろ！給油しろよ！！」
ヒュッ　ガラァァンッ
言われた通りバットを捨て給油する
「なあ・・・見逃してもらえないか？ぼくらは・・・親が無事かどうか確かめに行く途中なんだ」
「俺の話を聞いてんなかったのかよ！街にいるんじゃおまえの家族も俺の家族と同じだよ！」
ガコッ
「終わった」
「じゃあ行けよ！行っちまえよ！」
「なあ　本当に頼むよ　見逃してくれ！！」
「うるせぇっ！！おまえもぶち殺してやろうか！！」
男がナイフを振り上げるこの時を待ってた　直ぐ近づいて肩に銃を突き付ける

「な・・・・」
「撃つのは初めてだけどこれなら外れない」
「い　い　引火するかもしれねーぞ」
「女を盗まれるよりマシだ」
パアァン
ドッ　カランッ
「ひっ・・・・ひいいいいっ　ひいっ　これっ　ひいっ穴が血がっ
穴っ血があっ！！」
ジャカッ
麗が警棒を出し男に近づく
「よくもっ　よくもっ・・・」
「ひいっ　やめっやめっ痛い　助けてぇっ　痛いよぉっ」
「くっ」
「止めとけよ麗」
「・・・でもっ」そんな奴を相手にしているヒマは無い。それに僕らは随分と音を響かせたはずだ・・・」
「！！」
周りは＜奴ら＞だらけになっていた。すぐ麗とバイクに乗る
「おい・・・おい・・・行っちまうのかよ！俺を一人で・・・助けてたすけてくれよっ
というわけでようやく分かったというわけだ
「たすけっ　げへっ　げほっ　が　あ」
「ハア　これからもこういう事は何度でも有るんだろうな」
「・・・そうなの？いえ、そうね」
「そうさ」
自分達はこれまでの全てが終わる中にいる　その事がようやく――
――
「ひいっ　よるな　よるなっ　畜生　よるなあああああっ　いいいいいいいがぁぁぁぁぁぁぁっ」
「どうしたの？」

「なんでもない」

なんでもない筈が無かった　終わりが始まってからたった半日でぼくは一人の人間を死においやったのだ

第１０話終了

第十話（後書き）

次も主人公出ません。
次の次には出ます。
誤字脱字あったら連絡お願いします。

第十一話（前書き）

すいません。今回短いです。しかも主人公出ません。

第十一話

第１１話
？？？ｓｉｄｅ
飛行機の操縦室に少し若い男が入る。そして席に座っている４０代のパイロットに報告する
「乗客のチェック完了しました。該当しそうな者はいません　負傷している者も高熱を発している者も・・・もう死んでいる者も」
「君、家族は東京だったな」
「電話には誰もでません」
そういうと若い男は通信機を耳にかける
『Ｔｏｋｏｎｏｓｕ　Ｔｏｗｅｒ”ＪＸ０８９”　Ｒｅａｄｙ　ｆｏｒ　ＴＡＫＥ－ＯＦＦ．（床主管制塔　こちら０８９便離陸準備完了した）』
『”ＪＸ０８９”　Ｔｏｋｏｎｏｓｕ　Ｔｏｗｅｒ　Ｈｏｌｄ　ｏｆ　ＲＵＮＷＡＹ３４，ｗｅ　ｈａｂｅ　ａ・・・ｐｒｏｂｌｅｍ．（０８９便こちら床主管制塔滑走路端で待機せよ。我々には・・・問題が生じている）』
？？？ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ
二人の武装した男女が高台にいた。一人は狙撃手、もう一人がスポッターのようだった。
ＰＳＧ－１のについているスコープで一人の男性の頭を狙う
「あら～いい男、見覚えがあるわ」
「床主へ公演に来てた俳優だよ。・・・左右の風はほぼ無風　修正の要なし！射撃許可確認した！！」
バスッ
その俳優の眉間を貫きそのまま他の＜奴ら＞を狙い撃ちしていく

バスッ　バスッ　バスッ　バス
「お見事！化け物どもは全滅だ！」
「ふーーーっ」
モミモミ
狙撃手の女性、県警特殊部隊Ｓ．Ａ．Ｔ第一小隊狙撃手・巡査長
南リカは立ち上がり自分の胸を揉む
「・・・なにやってんだ？」
「朝から寝ころびっぱなしだったのよ、痺れちゃった」
「俺が揉んでやってもいいよ」
「あたしより射撃がうまいならいいけど？」
南　リカの言葉にスポッターの男性は肩をすくめ答える
「全国の警官のベスト５に入るおまえにか？無茶言うなよ！」
「ならあきらめて」
「にしても船でしか来られない洋上空港にまで出るとはな・・・立ち入り規制はしてるんだろ？」
「ええ、要人とか空港の維持に不可欠な技術者そうした連中の家族・・・その中の誰かが“なった”のよ。今はいいけどいつまで持つか」
「化け物による被害の少ない北海道や九州の空港は受け入れ拒否を始めてる。俺達が空港警備のために派遣されてなければどうなっていたことか・・・しかし、弾も無限にあるわけじゃないから・・・」
「逃げるつもり？」
「そのつもりは無い、まだね」
「わたしは街に行くわ。いずれは・・・」
「男でもいるのか？」
「・・・親友がいるのよ」
第１１話終了

第十一話（後書き）

誤字脱字あったら連絡お願いします。
次主人公出ます。

第十二話（前書き）

暑いですね、豪雨ですね、文才欲しいです。すいませんやっと主人公出ました。

第十二話

第１２話

刃ｓｉｄｅ

バスの中では紫藤が延々とお話をしていた

「それぞれが勝手に行動するよりどこか・・・安全な拠点を得た後に行動するべきです。例えば家族の安否も規律ある集団としてから――――――」

「平野っ」

「んあ　あ　高城さんおあようございま」

平野はヨダレ垂らしながら喋る

「よく寝られるわね」

「だって・・・これじゃあ」

道はかなりの渋滞になりこのバスもその渋滞に巻き込まれていた

ピーッ　ピーッ

「街の外に逃げたほうがいいのに」

「車だけが脱出の手段じゃないわ」

「あ、洋上空港か」

「港もあるし都市部が危険なのは目に見えてるからどこかの島に逃げようとしてるのがたくさんいるはず、武器の人口比が高い孤立した地域とかも」

「沖縄とか？・・・」

「適切な対処が行われていたら北海道や九州でも・・・飛行機が向かってるのはたいていそのあたりよ」

「僕らもそういうとこ行きますか」

（遅せーよ。今はもうどこも受け入れ拒否とかなってるだろ）

「遅すぎるわ。自衛隊とかアメリカ軍が多い地域はたとえ＜奴ら＞を抑制できていても受け入れに厳しい方針をとり始めているはずよ。

いいえ恐らく世界中のあらゆる所がそうなる・・・他者との接触は＜奴ら＞の侵入を意味しかねないとしたらアンタどうする？」
（・・・死ぬまで戦う）
「引きこもります」
「世界中の人間がそう考えたらどうなるかしら？生き延びるのに必要な最小限のコミュニティを維持することだけを考えるようになったら・・・」
「高城さんは本当に頭良いんですね」
「なに言ってんのよ」
そういって高城は紫藤を指差す
「あいつもうそういうノリになってる。自分で気付いてるかどうか分からないけど　いい？たった半日でそうなのよ？」
「追い出しましょうか？」
チャッ
そう言ってコータが釘打機を構える
「それより　どうやって生き残るか考えたほうがいいわ　信用できる相手と・・・もうっ小室がいたら相談できるのに」
「高城さん小室のこと好きですもんね」
「バカ言わないでよっ」
高城は真っ赤になって言う。そして話に混ざらなかった毒島先輩と鞠川校医が混ざる
「「ふーーん」」
「ちょうどいいわ　マジやばいわよ」
「こういう時だからこそ我々は藤見学園の者としての誇りを忘れてはなりません！その意味でバスを飛び出して行った宮本さんや小室君は皆さんの仲間にはふさわしくなかったのです！！」
「確かになあれではまるで宗教団体の勧誘だ」
「皆で力を合わせこの難局を切り抜けるのです！！」
「まるでじゃなくてまんまそのとおりよ　新興宗教・・・紫藤教の始まりを目にしてるのよあたしたちは」

「プッ紫藤教っククッおもしれー。高城に座布団一枚っ、あははっ」
紫藤教で俺だけ受けて笑っていた
「そこっ茶化さない！でも話を聞いてる連中を見てみなさい」
「道がこの有様ではバスを捨ててにげるしかないな　なんとか御別橋をわたらないとな。孝との約束もあるし」
「随分小室のこと気にするわね、家族のことは気にならないの？」
「俺には親いねぇよ？」
「「え？」」
「俺は孤児院で育ったからな」
「・・・えっと、そのゴメン」
「気にすんなって、それに孝は友達だからな」
「えっと毒島先輩のご家族は？」
「家族は父一人だし国外の道場にいるよ」
「あーえーと高城さんお家はどこなの？」
「小室とかと同じ御別橋の向こう」
「あー僕も両親は近所にいないんであの　高城さんとかと一緒ならどこでも」
「ご家族はどちらにおられるのだ平野君？」
「父さんは宝石商でオランダへ買いつけに　母さんはファッションデザイナーなんでずっとパリにいて」
「何時の時代のキャラ設定よそれ！」
「マンガだとパパは外国航路の客船で船長さんとかでしょ」
「・・・お祖父ちゃんがそうでした　お祖母ちゃんはバイオリニストだったし」
「か　完璧・・・」
「クククッおもしれーお前ら」
「で、どうするの？私も一緒に行きたいから」
「いいの？」
「私はもう両親いないし親戚も遠くだし、こんなこと言っちゃいけないんだけど・・・紫藤先生あんまり好きじゃないの」

「くっ」
「だははははっ」
「？どうしたのですかみなさん？ここは一致団結して・・・」
「ご遠慮するわ紫藤先生　あたしたちにはあたしたちの目標があるの！修学旅行じゃあるまいしあんたに付き合う義理なんてないわ！！」
「あなたたちがそう決めたのでしたらどうぞご自由に高城さん　なにしろ日本は自由の国ですからね！！」
「そりゃアメリカだろ」
「しかし・・・あなたは困りますね鞠川先生！」
「無視かよ」
「現状で医師を失うのはマイナスが大きすぎます　どうです残ってもらえませんか？こちらにもあなたを必要とする生徒たちがいるのです　さあ鞠川先生居場所さえはっきりさせておけば高城さんも困った時はあなたを頼りに・・・」
バシュッ
コータが紫藤を撃った。しかし釘は紫藤の頬を掠っただけだった、しかし
「ひ　平野君・・・？」
紫藤はふらふらと腰が落ちる
「外したわけじゃない。たまたま外れたんだ」
「き　君はそんな乱暴な生徒じゃ・・・」
「俺が学校で何人やっつけたと思います！？だいたいおまえは前から俺のことバカにしてきたじゃねーか！！我慢してきた！俺はずっと我慢してきた！普通に生きていたかったから我慢してきたんだ！！でももうそんな必要はない！！普通なんてなんの意味も無い！！だからぼくは・・・殺せる　生きている奴だって殺せる」
「ひ、平野君そ　そんなことは・・・」
「毒島先輩！凶神君！先に下りてください　ぼくが後衛をつとめます！！」

「はっいいじゃねえか！コータ！！俺のことは刃でいいぜ！！」
「男子だな　平野君」
そういって俺達はバスの外に出る
第１２話終了

第十二話（後書き）

誤字脱字あったら連絡お願いします。

第十三話（前書き）

すいません少し遅れました。

第十三話

第１３話
刃ｓｉｄｅ
俺達はとりあえずバスを出て＜奴ら＞のいないところまで移動した
「どう進む？私はこの辺りはよく知らん！」
「とりあえず御別橋を確かめてからがいいわ」
「無駄だってこの渋滞見れば高城でも封鎖されてるとわかるだろ？」
「そうね、でも小室と会えるかもしれないしとりあえず行ってみましょう」
「！」
「あれは・・・」
少し歩いたところでバイクをもった孝たちと会った
「先生！」
「あらあら宮本さん！」
宮本は鞠川校医に抱きついていた
「まだ死んでないのか孝？とっくにくたばっちまったと思ってたぜ」
「残念ながら死んでないよ」
「「ははっ」」
俺と孝は拳を合わせる
「無事そうでなによりだ。小室君」
「毒島先輩も・・・」
「アタシは？」
高城の目が怖い
「ぶ　無事そうで良かったよ　高城も平野も」
「渡河する方法を見つけられないでいる」
「僕らも同じです」
「上流は？」
「この辺りは後岸工事とかしちゃったから上流ならイケルかも」

「雨降って増水してるしどうだろ・・・・」
「あの・・・今日はお休みにしたほうがいいと思うの」
「お、お休みって」
「一時間もしたら暗くなるから　暗くなって出くわしたら毒島さんも凶神君も大変でしょ？」
「その案には俺も賛成だ。無駄に動き回って体力を減らすよりもどこかで休んで作戦を練ったほうがいい。それに栄養も取っておかないと集中力も切れる」
「それはそうだけどどこで朝まで休むの？」
近くの城を見て少し笑いながら毒島先輩が言う
「篭城でもするか？」
「この人数じゃ無理だ」
「あ　あのね使える部屋があるんだけど　歩いてすぐの所なんだけど」
「カレシの部屋？」
「ち　ちがうわよ！お　女の子のお友達の部屋だけどお仕事が忙しくて空港とかにいるから鍵を預かって空気の入れ替えしてるの」
「マンションですか？周りの見晴らしはいいですか？」
「あ　うん川沿いに立ってるメゾネットだから直ぐ近くにコンビもあるし　あ　あとね車も置きっぱなしなの戦車みたいな四駆よ」
鞠川校医が手を振って車の大きさを表現しようとがんばっている。・・・大きいのか？
「移動手段はどのみち必要だ」
「確か今日はもうくたくた電器が通っている内にシャワーでも浴びたいわ」
「シャワー」と言う高城に反応するコータ
「そ　そうですね」
孝がバイクに乗る
「静香先生後ろに乗って下さい」
「あ　うん」

「先生と一緒に確かめてきます！毒島先輩　刃　後のことは・・」
「承知した」「オッケー任せろ」
孝たちが行き俺達はコンビニで食料を持って少し歩くと二人がいた
そして家の前に行くとハンヴィーがあった
「いったいどんなお友達よ」
「＜奴ら＞は塀を乗り越えられないから安心して眠れるわね」
「高城なにか使える物あるか？拳銃は有るけど当てる自信はないんだ」
「え　銃！」
コータが飛びつく
「後で弄らしてやるよ。ともかく今は・・・」
あああああああああ　あああああああああ　うううううううう
＜奴ら＞が開いている部屋から出てくる
「こいつらの掃除だな」
「小室　これでいい？」
高城は孝にバールを渡す
「ああ、十分だ下がってろ」
「お互いにカバーすることを忘れるな」
「行くぞ！！」
そういって俺達はメゾネットの中の＜奴ら＞を片付け正面の門を閉じ鞠川校医の友達の部屋に入った
第１３話終了

第十三話（後書き）

誤字脱字あったら連絡お願いします。

第十四話（前書き）

学校始まってしまった

第十四話

第１４話
刃ｓｉｄｅ
女子チームは全員で風呂に入っていた　そして俺達は鞠川校医の友達の部屋でなにか使えるものを探していた。するとなぜかガンキャビネットがあり鍵の付いてないほうには弾薬や双眼鏡、クロスボウ、ナイフなどが入っていた。そして今鍵の付いたほうをこじ開けようとしている・・・しかしそんなことは全く知らない女子は風呂場でキャーキャー騒いでいる
「楽しそうだなぁ」
「セオリーを守って覗きに行く？」
「瞬殺されそうだな」「俺はまだ死にたくない」
「これで何も入ってなかったら頭痛いな」
「入ってるよ　弾薬はあったんだから絶対に・・・」
「まあいいさ　いくぞ！」
「１　２　３」
ガキッ
バカンッ
いきよいよく開きコータと孝はずっこける
「！　あ・・・・おい平野」
「やっぱりあった・・・」
「静香先生の友達だって言ってたよなここの人　一体どんな友達なんだ？」
中には長銃が二丁　散弾銃一丁　拳銃一丁あった。
コータが目をキラキラさせながら銃を手に取る
ジャカッ
「スプリングフィールドＭ１Ａ１スーパー・マッチか　セミオートだけど　ま、Ｍ１４シリーズのフルオートなんぞ弾の無駄遣いにし

かならないし」
「あの、平野？」
ガシャガシャ
コータは不気味な笑いをしながら銃を点検する。その手はかなり慣れているようだった。
「マガジンは２０発入る！！日本じゃ違法だ違法　うふ」
「おーい　ひらのー」
「無駄だって孝　もう止まんねーよ」
「・・・みたいだな」
コータは次の銃に移る
「ナイツ－ＳＲ２５狙撃銃・・・いや日本じゃそんなもの手に入らないからＡＲ－１０を徹底的に改造したのか！」
孝が散弾銃を手に取る　すかさずコータが銃の説明に入る
「それはイサカＭ３７ライオットショットガン！！アメリカ人がマジヤバなショットガンだ　ヴェトナム戦争でも活躍した！」
ジャカッ
孝は生返事をするとおもむろにこっちに銃口を向ける
「っち」
すぐ俺はこっちに向けた銃口を外させ孝を倒し手を後ろにさせる
ダンッ
「がっ」
「弾入って無くても銃口はむけるな」
一瞬で制圧した俺にびっくりしたのか二人とも唖然としている
「わ、悪い」
すぐ倒れて入る孝を立たせる
ボーっとしているコータは正気に戻るとすぐ喋りだす
「そ、そうだよ！人には銃口を向けちゃ駄目だ！向けていいのは・・・・」
「＜奴ら＞だけか、本当にそれで済めばいいけど」
（絶対にそうはならない。食料、安全な場所を求めて戦う事になる。

）
「あと、銃はこれか」
俺はそう言って拳銃を手に取る
「それはＨ＆ａｍｐ；Ｋ　ＵＳＰ　警察の特殊部隊ＳＡＴに配備されてる拳銃だよ！フラッシュライトもついてるみたいだね！！」
俺はＵＳＰの点検をする。前世で銃は使った事があるので慣れている。この銃の持ち主は結構ちゃんと整備していて油も差す必要もなかった
その後俺達はマガジンに弾を込める作業をしていた
「小室も手伝ってよ　弾込めるの実は面倒なんだよ」
「エアソフトガンで勉強したのか？」
「まさか　実銃だよ」
カチャカチャ
「本物持ったことあるのかよ！？」
チャ　チャ　チャ
「アメリカに行ったとき民間軍事会社・・・ブラックウォーターのインストラクターに一ヶ月教えて貰ったんだ」
「お前ってそういう方面だけは本当に完璧なのな　嫌われなくて良かった」
「にしてもどういう人なんだ鞠川先生の友達？ここにある銃絶対に違法だろ」
「基本的に違法じゃないよ。ここにある銃とパーツを別々に買うのは、その後組み合わせたら違法になる。でもＳＡＴの隊員だって鞠川先生が・・・」
「警官ならなんでもありかよ」
「普通の人じゃないのは確かだね、結婚してない警官は本来なら寮に住まなければならないのにこんな部屋を借りてるなんて実家が金持ちか・・・付き合ってる男がかねもちか、汚職でもしてるのか」
「キャーーー」
きゃっ　きゃっ　きゃっ

結構、いやかなり女子は五月蠅かった
「さすがに騒ぎ過ぎかも」
「大丈夫だろ　＜奴ら＞音に反応するけど一番うるさいのは・・・」
「・・・」
外では橋の方で警察が警報や避難誘導などをしていた
第１４話終了

第十四話（後書き）

後二話で二巻終了です。
二巻終わったら番外編やろうと思います。
誤字脱字あったら連絡お願いします。

第十五話（前書き）

八月ももう終わってしまいますね。

第十五話

第１５話
刃ｓｉｄｅ

橋の方の音は恐らく町中に響いていた
『たとえ家族であっても襲い掛かってくる者からは離れなさい！繰り返す――――離れなさい！負傷した者他者に襲い掛かる者は通せない！』
「映画みたいだな」
「『地獄の黙示録』にこんなシーンが・・・なんだあれ？向こうに変な連中が」
橋ではプラカードなどを持った人たちが警察の所に向かっていた
ピッ
孝がテレビをつける
『警察の横暴を許すなー！！われわれはぁ政府とアメリカの開発した生物兵器によるぅ殺人病の蔓延についてぇ徹底的に糾弾するぅ！！』
テレビに映ったのは一人のヘルメットを被ったオッサンが前に立ち同じくプラカードや『反対』や『即刻橋を開放せよ』など書いた布や木をもって叫んでいた
『ただいま警察などによる橋の封鎖に対する抗議を目的としたらしき人々がシュプレヒコールを叫び始めました！どのような団体なのかは不明ですが・・・』
「くだらねぇ」
「殺人病・・・って」
「＜奴ら＞のことじゃないかな」
「＜奴ら＞が日本政府とアメリカ共同開発した生物兵器が漏れたからだって言うのか・・・正気かよ！死体が歩いて人を襲うなんて現

象科学的説明がつくはずないのに！！」
「ってことは連中設定マニアなのかな　それとも悪い病気か　左翼だよね？」
「確かに左翼は設定マニアで悪い病気だ。極右の人種差別主義と同じくらいに悪い病気だよ」
「小室もそういうこと言うんだ」
「お袋の同僚にいまでも左翼活動やってるがいてさ　学校で起きたいじめは見て見ぬフリするような反戦平和主義様だった」
「お袋さんの仕事は？」
「小学校の先生！川向こうの御別小学校で1年生のクラスを持ってる。生徒がいる限り逃げてないな・・・そういう人なんだ」
「お袋さんも左翼？日教組とか・・」
「まさか！俺のお袋だぜ？むしろ若いころは『パンッ』！？」
橋のほうでようやく発砲があったようだった
パンッ　パンッ　パンッ
次々と＜奴ら＞となった市民が倒れていく
『ついにぃ　市民に対して無差別の反動的暴力をぉ！！』
警官が一人団体のリーダーらしき人に近づく
『ただちに立ち去りなさい。ここにいてはあなたたちも危険だ』
『詭弁だ！！おまえたちはぁ政府とアメリカの陰謀を隠す為にぃ・・・』
『もう一度言う。政府と県警本部は最後の命令で治安維持の為に必要な全ての手段を取れと命じてきた。法律的には怪しいが命令は命令だ』
そういって警官は腰のホルスターにある拳銃を取り出しその男に向ける
『は？』
パンッ
『『キャアアアアアア』』
そしてテレビの画面は直ぐ切れしばらくお待ち下さいの画面になる

「うわぁ、どうにもならなくなってる。ヤバイな」
「ああ」
（ん？なっ！？）
後ろに気配を感じ後ろを見たら酔った鞠川校医が近づいてきていた。
俺はすかさずばれないように逃げる
「すぐに動いたほうが・・・」
「駄目だよ　明るくならないと＜奴ら＞にいきなりやられるかも」
「ひっ」
そして魔の手は孝に襲い掛かる
むにゅん
「はへっ」
「こっむっろくーん」
鞠川校医はなんとバスタオル一枚だ、そして孝の頬にキスをする。
孝はかなり驚いていた
「せ　先生？酔ってるんですか！？」
「うふふふふ。ちょっと、ちょっとだけよ　ふふーん　あ　コータちゃーん！」
次はコータを標的にしたようだ
「ちゃん？あの　えと　あは」
「んーーっ」
ぶばぁっ
コータも頬にキスされ鼻血を出す
「大声は駄目です。下へ行ってください」
「えーだめーしずかお外こわいからずっとこーしてるのー」
そう言って鞠川校医はぐてっと倒れる
俺は逃げてたが階段を見たとき酔っている麗を見かけた
「孝、俺が鞠川さん運ぶよ、お前は階段にいるお姫様の相手しな。
コータ見張り頼む」
「あーーーーうん」
「刃お姫様って・・・」

「よっこいしょっと　結構重いな」
そういって俺は鞠川校医を背負い下に降りる
「ひゃんっお尻に触ってるぅ　刃君のえっちぃ」
「たのむから黙ってくれ」
孝と麗は少し話しこんでるようだ
下に降りて布団を掛け鞠川校医を寝かす。ソファーには高城が下着同然の格好で寝ていた。そいつにも布団を掛けてやる
水を飲もうと台所に行ったら声をかけられた
「刃君か、もうすぐ夜食が出来る。明日の弁当もな」
「ありがとうございます先輩。たすかりま・・・」
動きを止めた俺に不思議がって先輩は不思議そうに尋ねる
「どうした？」
「あーと、どうしたもなにもその格好」
そう今俺の目の前に下着＋エプロンという格好で先輩が料理を作っていたのだ。だれだってそれ見たら止まるよ先輩・・・
「ああ、これか合うサイズのものがなくてな　洗濯が終わるまでごまかしているだけだが・・・はしたな過ぎたようだな済まない」
「あーんなこたねぇけど、いつ＜奴ら＞がくるか分からねぇのに」
「君と平野君、小室君が警戒をしている。評価すべき男には絶対の信頼をしているのだ私は」
「・・・絶対の信頼・・・・ね。止めておいたほうがいい　絶対の信頼なんてない、それに誰かは必ずミスをする。俺も含めて、警戒は解かないほうがいいどんなに安全だと思っても。・・・いや、もう安全な場所なんて無い」
「・・・」
先輩は黙って聞いている
「あーと、それとこれ」
そういって俺は俺の学生服を差し出す
「え？」
「その格好だと風邪を引く。それに孝やコータ、俺もだが直視でき

ない」
「・・・プッ・・ふふふ・・ありがとう」
そういって俺の学ランを着る
「どーいたしまして先輩」
「友人には冴子と呼んで欲しいよ。」
「あー冴子さんじゃ駄目か？」
「まぁ、いいよ練習してからで」
パンッ
ワンッ　ワンッ　ワンッ
「犬・・・近い！」
そういって俺は二階に上がる。途中孝も来る
「コータ！」
「平・・・・」
「ヤバイよ」
わんっわんっ
犬の鳴き声で周りに＜奴ら＞が集まってきていた
第１５話終了

第十五話（後書き）

意見感想お待ちしています
誤字脱字あったら連絡お願いします。

第十六話（前書き）

次回番外編？です。

第十六話

第１６話
刃ｓｉｄｅ
犬の鳴き声や生き残りが銃を使ったりなどで回りは＜奴ら＞だらけだった
「・・・・・・・」
「畜生ひどすぎる・・・」
孝がＭ３７を持って下に行こうとする。それを俺は止める
「刃！」
「小室っ」
「なんだよ？」
「撃ってどうするつもりなんだ？」
「決まってるだろ！＜奴ら＞を撃って・・・」
「忘れたのか？＜奴ら＞は音に反応するのだぞ小室君」
「・・・・！」
「そして・・・」
カチッ
冴子さんは電気を消す
「正者は光と我々の姿をみて群がってくる。むろん我々は全ての命ある者を救う力など無い！彼らは自分の力だけで生き残らねばならぬ　我々が今そうしているように。何が言いたいのかは分かる、宮本から聞いたよ　君は過去一日に対して厳しくはあるものの男らしく立ち向かってきた　だが・・・よく見ておけ　慣れておくのだ！もはやこの世界はただ男らしくあるだけでは生き残れない場所と化した！」
そう言って孝に双眼鏡を渡す
「毒島先輩はもう少し違う考えだと思ってた」
「今冴子さんは現実を言っただけさ　俺も同意見だ　お前や俺達は

全てを救えるヒーローじゃない　それにただ撃つだけじゃ弾の無駄遣いだ」
「・・・・」
「あ、外を見るときはこっそりやってよ」
孝は外の惨状を見る
「・・・地獄だ・・・！」
外を見ると子供を連れた男性が家のドアを叩いて開けてくれるよう頼んでいたみたいだが開けた途端中の人間がその男性を刺し殺していた　子供は泣き叫び＜奴ら＞が寄ってくる
「く・・・そっ」
「ロックンロール！！」
ガァンッ
コータがＡＲ－１０を撃ち子供に近寄ってきた＜奴ら＞を撃つ
「試射もしてない他人の銃でいきなりヘッドショットキメられるなんて！やっぱ俺こういうことは天才だなぁ俺　ま、距離は１００ないけど　お！？」
ガガァンッ
また二体片付ける
「撃たないんじゃなかったのか？生き残る為には他人を見捨てるんじゃなかったのか？」
「小さな女の子だよっ！？助けるんでしょ？僕はここから援護するから！！」
孝は嬉しそうな顔をしている
「なにしてんのさ！せめてショットガン持ってきなよ！！」
ダッ
「使い方しらねーんだよ！！」
孝は下に走っていく
「どしたの？刃君」
「・・・弾の無駄遣いだな」
「っ！？でも！「仕方が無いか？」！！」

「もう撃ってしまったからどうこう言うつもりは無いが俺だったら見捨ててた」
「・・・・」
「まぁいい。弾は無限じゃないんだ、効率よく使えよ。俺は下に行って脱出準備してくる」
そう言って俺はＵＳＰを腰に挿し下に行く
ヴァァァン！！
孝はバイクを使って助けに行ったようだ
「おい高城　さっさと鞠川さん起こして脱出準備だ。頭良いんだろ？指示を出してくれ」
「五月蠅い！分かってるわよ！！」
ガンッ　ガンッ
「先生！ちょっと起きて先生！」
「はえ？もうあさごはん～？」
「ボケてる場合じゃないのよ！」
高城が鞠川校医の頬をおもいっきりつねる
「はへ　ひゃ　ひゃめてぇ　ひぇっ」
かなり痛そうだ　そして高城は鞠川校医を連れて二階に上がっていった
俺は玄関に行く　すると冴子さんがいた
「おや　刃君か」
「冴子さん・・・」
「君はどう思うかね？小室君たちが選んだ方法は」
「俺としては甘すぎる選択だと思いますよ　この調子で行けば確実に死に向かうようなもんです」
「辛口だね　現実的に考えるとそうだね　でも分かっていたんじゃないのか？小室君たちがこういう選択をすることを」
「・・・そうですね。やると思っていましたけどね」
「車の準備！」
高城が走ってくる　話はこれで終わりだ

「今なら車に乗り込めるな　＜奴ら＞は小室君に引きつけられている」
孝の行った方向をみるとうじゃうじゃ＜奴ら＞がいた
「げっどうするつもりよ？あれじゃバイクでも戻って来れないわ」
「なら・・・迎えに行ってあげるしかないんじゃない？」
寝ぼけている鞠川校医が言ってみんなの視線が集まる
「あ　あの　先生変な事言った？車のキィとかはあるんだし」
「いいや名案だ」
「てかそれしかないわ　決まりね！小室を助けた後川向こうに脱出！！さ準備して」
「大体は持ってきたぞ」
「！」
持ってきた荷物はかなりの量になっていた
「凄い量になっちゃったわね　全部積めるかしら」
「それよりどうやって積み込むかよ　途中で＜奴ら＞が来たら」
「ＲＰＧの盗賊みたいにこっそりやるしかないわよ」
「ではそうしよう」
静かにハンヴィーに荷物を積み込んでいく
「平野は？」
「まだ二階じゃないの？」
「ったく凄いんだかニブイんだか・・・・ひっ」
「えっ」
コータは左手にＡＲ－１０右手にＭ３７、頭にライト二本付けたかっこうで来た
全員が止まる
「え　あの　どうしたの？」
「楽しそうねアンタ」
「たいしたことないよ　小室に比べたら」
そう言って全員がハンヴィーに乗り上にＭ３７持ったコータと木刀を持った冴子さんになって孝のところに行く

ガアアアアアンッ
「うわ、いっぱい」
「といっても逃げるわけにはいかないんだから・・・」
高城が乗り出し叫ぶ
「と　つ　げ　きぃっ　！！！」
ドガアアアンッ
思いっきりハンヴィーで＜奴ら＞を潰していく
ギャガアアアアアッ
「孝っ！」
「はっ」
ジャカッ　ガアアンッ　ガアアンッ
コータがＭ３７を撃ちまくる
「川向こう行きの最終便だ　乗るかね？」
「もちろんっ」
そういって女の子と一緒にハンヴィーに乗り脱出した

第１６話終了

第十六話（後書き）

意見感想お待ちしています
誤字脱字あったら連絡お願いします。

番外編？（前書き）

すいませんすいませんすいません
今回は本編じゃないです。だらっだらなので見る方はご注意ください。
ごめんなさい

番外編？

番外編？
今回Ｈ．Ｏ．Ｔ．Ｄ．二次小説ＰＶ３７，７７４人！！ユニーク５，８１６人！！
なんてありがたいことがあったので二巻分まず終了しましたし番外編作りました！！
刃「だいぶ前にやるって言ってたけどな」
はい、すいません。今回は主人公。刃がゲストに出てます
刃「というか本編やれよ！こんなつまんないの誰も見ないぞ？どうせ更新面倒くさくなったんだろ」
いや～違いますよ。まぁこんなの皆さんも見たくないでしょうがだらだらと勝手に続けさせてもらいます
刃「おい！」
えー前に「ヒロインは誰？」的な質問を貰いましたがその人には言ったんですがちゃんと言ったほうがいいと思ったので言っときます。
ずばりっ・・・毒島冴子さんです。
まぁみなさん分かってしまっているかもしれませんが・・・。
刃「・・・いやあんなに露骨に書いたら分かるだろ。原作ちょっと変えてるし」
はい、原作沿いに進むとは書きましたがちょっと変わってるところもあります
刃「いやちょっとというか結構変わってないか？」
ストーリーはあまり変えてませんよ。キャラ関係を変えているだけです・・・多分
刃「多分て・・・」
えー次です。
と言ってもあとなんか話す事あるかな・・・
あー・・・一応違うのも今作ってます。無謀ながら。

刃「お前頭いかれたか？」
すいません。でも作っているといえど全然上手くいかなくてまだまだ出せる段階じゃないです。しかもタイトルすらできてないし・・・。
刃「駄目じゃねーか。」
内容は一応二次小説じゃなくてオリジナルにしようとは思ってるんですが難しいですね。全然進まないです。
刃「そりゃそうだろ」
まぁいいです。んじゃ最後に
刃「はやっ」
まぁいいでしょ　でもこれ見て本編見なくなる人いたら怖いなぁ
刃「作者に幻滅するだろうな」
う～。まぁこんな駄目な作者でもＯＫ、こんな駄文でもＯＫという方！
刃「寛大な心だな」
はい黙って　えーこれからも更新は続けます。
刃「一週間に１度レベルののろまだがな」
そのとーりですが絶対に途中で止めません！それはお約束します。
（テスト前は休みいただきますけど）
刃「それ破ったらお前殺すぞ？」
はい。とまぁこんな感じで脅されてもいるので大丈夫です。・・・
まぁ作者が死んだら出来ないけど・・・
刃「おいっ！縁起でもない」
人間何時死ぬか分かりませんからね。とりあえずこれが完結するまで死ぬつもりは毛頭ないですが・・・
すこしネガティブな感じになりましたが
刃「てめーの所為だよ！」
というわけで
刃「どういうわけだよ！」
これからもＨ．Ｏ．Ｔ．Ｄ．二次小説よろしくお願いします！！

刃「無視かよ！ま、よろしく頼む」

？？？ｓｉｄｅ

アアアアアアアアアアアアアアアア

「くそっ頭だ頭を狙え！！」

航空機の中で＜奴ら＞とＳＰが戦っていた

パンッパン

「畜生！一体誰があの化け物を乗せたんだ！！」

「ファースト・レディが噛まれてたんだよ！」

パンッ

元ファースト・レディの頭が銃弾で貫通した

？？？ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

「大統領！コードを入力して下さい！！」

「しかし・・・」

「私もあなたも噛まれてしまったのです！だからこそ今の内に合衆国にＩＣＢＭを向けている全ての国を叩き潰しておかねばなりません！！国家非常事態作戦規定６６６Ｄの発令以外憲法と人民への義務を果たす必要があるのです！！」

ダンッ

「うぶっ　げぇ」

ビシャァァァ

喋っていた男が血を吐き出す

「議長！」

「「～～～～～～！！～～～！？」

話し合いがつづいていく。・・・終わりまで

番外編終了

番外編？（後書き）

はい・・・ほんとーにすいませんでした！！

第十七話（前書き）

すいません少し遅れました

第十七話

第１７話
刃ｓｉｄｅ
「♪～～」
ハンヴィーで川を渡っているときハンヴィーの上のそこに座っているコータの上で希里ありす（昨日の夜孝が助けた女の子）が楽しそうに歌っている
次にコータがなにか歌っていたが歌か？これ
「！～～～～～！！～～～～！」
「コータちゃんすごいー」
「ぬふ」
コータがキモい笑みを浮かべる
バンッ　高城が切れてハンヴィーを叩く
「そこのデブヲタ子供にろくでもない歌を教えんじゃない！」
するともう渡りきるのか対岸が近づいてくるのが分かる
「みんな起きて！そろそろ渡りきっちゃう！」
孝、麗、冴子さんは後ろで寝ていた
俺はＵＳＰとマガジンのチェックをする
チャッ　チャッ
ドドドド　グアンッ
「近くには誰もいないわ！」
「コータ、警戒は解くなよ。降りて安全を確認する」
そう言って俺は外に出て警戒しながら周りを見渡す
「一応大丈夫そうだ。孝！起きてるか？」
「ああ！」
すぐ車から孝が降りてくる
「女子は着替えるからこっち見んなだってさ」
「了解」

「ワンっ」
「お、相変わらず元気だな」
孝がありすを助けた時犬が一緒に付いて来た。名はジークだそうだ。
命名はコータだ、アメリカ軍が零戦のあだ名だそうだ。
「小室はこれ使えよ」
そういってコータはＭ３７を渡す
「ショットガンだから頭のあたり狙えば当たるし」
「だから使い方が分からないって・・・バットの方がマシだよ」
「銃の扱いは最低限覚えたほうがいい。バットだけじゃやられるぞ」
「うーん・・・」
シャコン
「これでショットシェルが送り込まれた。あとはサイトとターゲットを合わせてトリガーを絞る。それで頭を吹っ飛ばせる。練習してないから近くの＜奴ら＞にしておいた方がいい」
「弾が無くなった時は？」
カチャ
「こうするとこのゲートが開くから」
カチャカチャ
「こうやって押し込めばいい、普通は４発薬室に一発込めたままでも五発しか入らないから気をつけて。それからこの銃には特徴があって・・・」
「一度に聞いたって分かんないよ、いざとなったら棍棒代わりにする」
「・・・・・」
「おにいちゃん！」
「！　・・・・・・・」
「小室どうしたっての・・・！！」
「ん？どうし・・・！？」
男子三人が止まる。視線の先には女性陣が着替え終わった姿だった。
「あはははは」

「ふふふふふふ」
「・・・・・」
「なに？文句ある？」
「いや似合ってるけど・・・撃てるのか　それ？」
麗はＭ１Ａ１を持っていた
「平野君に教えてもらうしいざとなったら槍代わりに使うわ」
「あ　使える使える使えます！それ軍用の銃剣装置ついてるし銃剣もあるから」
俺は冴子さんの所に行く
「やあ刃君どうかな？」
冴子さんはけっこう刺激的な格好をしていた
「えーと、目のやり場に少し困ります」
「ふふふ」
少し冴子さんと話し込んでいるとコータが俺を呼ぶ
「刃君！堤防の周りを見たいから手伝って！」
「分かった、今行く。では」
「ああ」
そして俺とコータと孝で堤防を見る
「・・・クリア！」
「＜奴ら＞はいない！」
「静香先生！」
「いっくわよー！」
ガロオオオオオオッ　ガギャアアアアアアア
「あっぶね！」
ハンヴィーが堤防に跳んで？登った　あと少しで俺らも轢かれるｏｒ潰されるところだった
高城が双眼鏡を使って街の方を見る
「川で阻止できたわけじゃないみたいね」
「世界中が同じだとニュースは伝えていた」
「でも警察が残っていたらきっと」

「「・・・・・・」」
「そうね日本のお巡りさんは仕事熱心だから」
「うん・・・・うん！」
「これからどうするの？」
「高城の家は東坂の二丁目だったな」
「そうよ」
「じゃ一番近いまず高城の家だ　だけどあのさ・・・」
孝はかなり苦い表情をしている
「わかってるわ　期待はしてない　でも」
「もちろんだ！！さぁ行こう！！
そして俺達は高城の家に向かった
（ん？なんだ？おかしいぞ）
車に乗っている途中二つの事に気付く。
夜が明けてから一度も＜奴ら＞に会っていない事を
そして昨日あれほど飛び回っていたヘリや旅客機が一機も見えない
ことを
１７話終了

第十七話（後書き）

意見感想お待ちしています
誤字脱字あったら連絡お願いします。

第十八話（前書き）

今日誕生日なんでちょっとですが早めに上げます

第十八話

１８話
刃ｓｉｄｅ
俺達は移動中大量の＜奴ら＞に出くわした。さっきとうって変わってかなりの数だった
ゴオオオオオオオオオッ
「わっここも！もういやっ！」
「じゃあそこ左っ左よ！」
「コータ！まだ撃つなよ！」
「分かってます！」
「なんだってんだ？東坂二丁目に近づけば近づくほど＜奴ら＞が増える一方じゃないか！」
「理由が・・・なにか理由があるはずよ！・・・？」
「このまま押し退けて！！」
ドギャッ
ハンヴィーが＜奴ら＞を跳ね飛ばす
「え？・・・だめよ　だめ　停めてぇぇ！！」
「え？」
「ワイヤーが張られている！車体を横に向けろ！！」
「くそっ」
ギャアッ
ドガッ
＜奴ら＞を数体巻き込んでワイヤーにぶつかる
「見ちゃ駄目だ！」
コータがありすが車体の横のぐしゃぐしゃになった＜奴ら＞が見えないようにする
ズズズズズズズッ
「！？滑り過ぎてる！」

「停まって！なんで停まらないの！」
「人肉　い　いや血脂で滑っているのよ！」
ズルズル
「先生！タイヤがロックしてます！！ブレーキ放して少しだけアクセル踏んで！！」
「え？ええ！！」
ガッ
ゴオオオオオ
「先生！前！！」
ハンヴィーが壁に激突しようとする
「あたしこういうキャラじゃないのに！！」
壁にどんどん迫っていく
「対ショック姿勢！！」
ギッ
「え？」
ドッ
「がっ」
ドサッ
「う・・・あ・・・ぐっ」
麗が上から落ちて背中を強打したのか動けなくなっている
シャコンッ
「スライドをひいて」
だんっ
「孝！」
孝が助けに行ったようだ
「頭の辺りに向けて・・・撃つ！」
バスンッ
「う　お　とと」
反動で孝が体勢を崩す
「あんまりやっつけられないぞ！　よっ」

ジャコン
「なんだよ！頭狙ったのに」
「ヘタなんだよ！！反動で銃口がはねてパターンが上にずれてる！
突き出すように構えて胸の辺りを狙って！」
「突き出すように構えて・・・胸の辺りを狙って・・・撃つ！！」
バムンッ
二体吹っ飛ぶ
「スゴイ・・・けど　多すぎるな」
ガウッ　ガウッ
「一発撃ったあとトリガーを絞ったままスライドだけ引くんだ！銃口は少しだけづらせ！」
シャコン　バシャァ　バムンッ
「ひょおっ最高！！」
ガシュンッ　カキンッ
「弾切れかよ！あっくそ」
ばらばらとショットシェルを落とす
パンッ　パンッ
「浮かれ過ぎだ！さっさと助けに行け！！」
援護しにまず近くの奴を二体片す
「私も援護する！」
「木刀じゃ数が多すぎます」
「分かっているよ！」
「死ぬんじゃねーぞ！」
パンッ　パンッ
ゴキンッ　バカッ
周りは＜奴ら＞だらけになっていた
「畜生！」
パンッ　パンッ　パンッ
「くそ　多すぎる」
ガアンッ　ガアンッ

孝が麗のＭ１４を使っているがほとんど当たっていない
ガアンッ　パンッ　ガアンッ　ガアンッ　パンッ　パンッ
「みんなやっつけてやる！」
「小室の鉄砲を拾ってアタシが使う！！」
「あ　危ないわよ！」
バンッ
「高城さんっ！」
高城が出てくる
「弾は足元に！！使い方分かりますか！？」
「アタシは天才なの！」
「高城！」
「今度から名前で呼びなさいよ！」
カシャカシャ　ジャコン
「はっ」
高城に近づいてきた奴を冴子さんが片付ける
パンッ　パンッ
冴子さんに近づいた奴を殺る
「アタシは臆病者じゃない　アタシは臆病者じゃない！アタシは臆病者じゃない！！」
バムンッ
「死ぬもんですか！誰も死なせるもんですか！！・・・アタシの家はすぐそこなのよ！！」
ガアンッ
・・・シューッ
パンッ　パンッ
「全員弾切れか・・・俺が囮になるからさっさとワイヤーくぐって逃げろ！！」
「「「！」」」
「こっちだクソッたれ」
パンッ　パンッ　パンッ

「刃君！！」
（くそ　なんで俺こんな事してんだ）
パンッ　カキッ
（・・・弾切れ注意は向いたか）
「あああああああ」
「その場に伏せなさい！！！」
「は？」
ズパアッ
放水器もった奴らが＜奴ら＞を水で押し飛ばしていく
「刃君も速く！！」
ズササッ
スライディングでギリギリワイヤーの向こう側に着く
「ここならもう大丈夫！」
「助かったぜ」
「危ないところを助けていただきまことにありがとうございます」
冴子さんが深くお辞儀する
「当然です。娘と娘の友達の為なのだから」
マスクを脱ぐと女性だった
「・・・ママ！！」
１８話終了

第十八話（後書き）

意見感想お待ちしています
誤字脱字あったら連絡お願いします。

第十九話（前書き）

テストで遅れました。
すいません。ではどうぞ

第十九話

１９話
刃ｓｉｄｅ
俺達は高城の家で一日ゆっくりと休んでいた
俺は銃の整備をコータと一緒にやった後屋上で筋トレをしていた
「っし　っし　っし」
（しかしでかいな、さすが右翼団会会長の家というのは。しかし・・・ずっとここには居られない。）
「っし　っし　っし　・・・やっぱり相談するか孝と」
俺は筋トレを止め孝の所に向かって歩いた

刃ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
孝ｓｉｄｅ
「今から自分で薬塗るから！！」
バンッ
麗が背中を強打したところの薬を塗るのを手伝っていただけなのにいきなり出された
「いい気なもん・・・仕方ないか、ようやくまともに休めたんだから」
ぼくらは高城の実家ですでに一日過ごしていた。この騒ぎが始まって以来の“いつもどおり”の時間だった
バタンッ
「分かったわよ！ママはいつだって正しいのよ！！」
高城が少し涙ぐみながら歩いてくる
「高城・・・」
キッ
・・・すごい睨んできた　何故？
「名前で呼んでって言ったでしょ！！」

「あ　えと　ごめん」
「男のクセにほいほい頭をさげないでよ！」
どうしろと・・・
「まあいいわ・・・今はいい！！アンタにだけは・・・もおいい！！」
ダダッ
（？？　なんだってんだ）
「迷惑をかけてしまいましたね」
高城のお袋さんだ
「いえ、あー」
「慣れていますか？幼稚園の頃からのお友達ですものね」
「はは　いやあの・・・にしてもすごいですね。大きい家だってのは知ってましたけど・・・ここまで凄いなんて」
「あなたは遊びにいらしたことなかったものね」
「いや　まあその」
「右翼団体会長の家は怖いものね」
「えーとあの・・・すいません」
「正直な男の子は好きよ」
「あは、あの・・・でもここに長居はしないとか」
「ええ、今のところの床主の電力は水と同じく奥名湖に作られたダムの発電所によって供給されている。でも・・・水力発電所や変電所には防衛のためテロに備えて待機していた自衛隊の一部が投入されています。」
「あ・・・」
そういえばヘリが移動してた
「でもそれなら維持することは・・・」
「・・・そこを動かし整備している人々はいつまで働き続けられるかしら？彼らにも家族はいるでしょう。そして家族は発電所にいるわけではないわ」
「じゃああのバスとかで」

高城のお袋さんの目が鋭くなる
「ええ、私たちが責任の持てる・・・いいえ私たちと共に生き残る覚悟のある人々だけを一緒に連れて行く!!あなたたちに生き残る覚悟がある事に疑問はありません。今までですらよく生き残れたもの!!」
孝ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
刃ｓｉｄｅ
歩いていると冴子さんに会った
「やあ刃くん」
「・・・なんでも似合いますね冴子さんは」
「え・・・あぁ・・・ありがとう」
照れてるのか？
「よお刃」
「ああ孝　探してたんだ」
「え？「どうしたのお兄ちゃん達？」あぁありすちゃん」
「ありすちゃんが元気で良かったって話してたんだ」
「ありす元気だよ！」
この子は強い・・ただまだ子供で昨日の夜も悲鳴が何度も聞こえたまだ彼女は克服できていない・・・そんなに簡単にできるものでもないが
ガチャッ
「小室！」
高城とコータがドアから出てきた
１９話終了

第十九話（後書き）

意見感想お待ちしています
誤字脱字あったら連絡お願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8087t/

H.O.T.D.二次小説

2011年10月8日21時24分発行